



「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と関連する体験の抽出—  
幼稚園の異年齢集団遊び「あそびっこだいさくせん」の実践☒—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本田, 真大, 小椋, 美和子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00007084">https://doi.org/10.32150/00007084</a>

## 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と関連する体験の抽出

— 幼稚園の異年齢集団遊び「あそびっこだいさくせん」の実践(4) —

本田 真大・小椋美和子\*

北海道教育大学函館校 学校臨床・子育て支援研究室

\*北海道教育大学附属函館幼稚園

Extracting Experiences Related to “Ideal Image by the End of Childhood”:  
The Practices of Multi-age Infants during Playful Time in Kindergarten(4).

HONDA Masahiro and OGURA Miwako\*

Department of Education, Hakodate Campus, Hokkaido University of Education

\*Hakodate Campus, Hokkaido University of Education Kindergarten

### ABSTRACT

The study aims to extract experiences related to “ideal image by the end of childhood” in the kindergarten. The experiences were illustrated by analyzing documents on ten practices of three- to five-year-old infants’ playful time during extracurricular hours. The necessity of illustrating the developmental process from the perspective of “ideal image by the end of childhood” was discussed.

Keywords : ideal image by the end of childhood, kindergarten teacher training program, infant

### 問題と目的

#### 1. 保育・幼児教育の質

近年、国際的に乳幼児期の教育とケア（Early Childhood Education and Care, ECEC）の質の重要性が指摘されている（OECD, 2006 星・首藤・大和・一見訳 2011）。わが国の幼児教育の質に関しては、「幼児教育の質の向上について（中

間報告）」（文部科学省, 2020）の中で、質の向上のための具体的方策が「幼児教育の内容・方法の改善・充実」、「幼児教育を担う人材の確保・資質及び専門性の向上」、「幼児教育の質の評価の促進」、「家庭・地域における幼児教育の支援」、「幼児教育を推進するための体制の構築」、「新型コロナウイルス感染症拡大の状況における幼稚園等の具体的な取組」、の6点から整理されている。「幼

幼稚園教育要領等の理解推進・改善」は第一の「幼児教育の内容・方法の改善・充実」の一つに挙げられている。

## 2. 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

幼稚園教育要領（文部科学省，2017），保育所保育指針（厚生労働省，2017），並びに幼保連携型認定こども園教育・保育要領（内閣府・文部科学省・厚生労働省，2017）の中で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されている。

文部科学省（2018）によれば，幼児期の終わりまでに育ってほしい姿とは幼稚園教育において育みたい資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿であり，特に5歳児後半に見られるようになる姿である。そのため保育者は遊びの中で幼児が発達していく姿を幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を念頭に置いて捉え，発達に必要な経験が得られるような状況を作ったり援助を行ったりすることが求められる。

## 3. 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿からの幼児理解

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は5歳児よりも前の時期から，乳幼児が発達していく方向を意識して，それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくものである（内閣府・文部科学省・厚生労働省，2018）。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿から幼児理解を深める方法として，宮里（2018）は幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を具体的な子どもの姿と重ねる作業を行うことを提案している。また，青木（2018）は各姿の記載内容を細かく区切って「そのような経験があるか」と実践を振り返る方法を挙げている。そして，5歳児後半の姿を捉えるのみでなく，乳児保育や1歳以上3歳未満児の保育（無藤，2018b），3歳児，4歳児の保育（無藤，2018a）の中から，それぞれの発達の時期に見られる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を具体的に捉える報告もなされている。

しかし，異年齢集団の遊びの中から幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を抽出した報告はほとんど見られない。異年齢の幼児同士が関わり合う

姿を幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の点から捉えることで，幼児理解の新たな視点を提供することが期待されよう。

## 4. 本研究の目的

以上より本研究では幼児の異年齢集団の遊びの中で観察された異年齢幼児同士の関わりの様子を幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の点から読み取り，抽出することを目的とする。

## 方法

### 1. 対象者

国立大学法人A大学の第一著者の研究室に所属する大学3年生5名（女性）と4年生1名（女性）及び必修科目「地域プロジェクト」で第一著者のプロジェクトを履修した2年生4名（女性）が実践を行った。学生が所属する専攻は小学校教諭免許の取得が必須であり，幼稚園教諭免許の取得は選択制であった。

### 2. 実践対象園

国立大学法人A大学の附属幼稚園を対象園とした。実践当時の在園児数（2019年5月1日時点）は60名（3歳児クラス9名，4歳児クラス24名，5歳児クラス27名）であった。実践対象園の特徴として，園児は年齢別のクラスで生活し，縦割り保育など異年齢交流はほとんど経験していなかった。

預かり保育に関して，本実践「あそびっこだいさくせん」を行った2016年度より預かり保育の全日実施（年間約175日）を開始していた。預かり保育の内容として，家庭的な雰囲気の中で好きな遊びをして過ごす「わくわく」の時間を中心とし，音楽，科学，語学，日本文化，運動の活動を行う日，そして本実践等の大学研究室が参加する活動の日があった。年度を通して常時，預かり保育を利用する幼児は10名前後であり，その他の幼児は活動内容を選んで預かり保育に参加した。そのため，幼児や保護者の興味・関心に応じて預かり保育の参加人数が日によって異なるという特徴があった。

### 3. 実践方法

2019年4月～2019年2月にかけて概ね月1回（合計10回）、1回あたり50分の遊びを構想した。合計10回のうち9回は預かり保育の時間に、1回（8月）は5歳児（年長児）の宿泊保育の一部として実践した。

実践の方法は本田・小椋（2020, 2021a, 2021b）と同様であり、実践日の2週間前に第一著者の指導の下、当該月の担当学生が「自分が楽しめること」を中心的な内容とし、幼児の主体的な遊びを重視した指導案を作成した。その後、第一著者が預かり保育担当職員である第二著者と打ち合わせを行い、その結果を学生に伝えて指導案を修正し、教材を作成した。実践は幼稚園到着後10分程度で環境を構成し、50分間（14:45-15:35）の活動後、片付けを行った。

実践の約1週間後に第一著者と学生でねらいに対する評価と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の点からの子どもの体験の抽出（約90分）を行った。体験の抽出にあたっては、観点に関わる姿を検討した。

また、各回の活動について保護者宛の活動報告（「あそびっこ便り」）をA4で1枚作成し、幼稚園便りに同封して幼稚園を通して保護者に配布した。作成方法は本田・小椋（2020, 2021a, 2021b）と同様であり、活動の様子の説明及び幼児心理学、幼児教育等の観点からの活動の解説（幼児にとっての実践の価値等）を掲載した。さらに、第一著者が遊びの流れや幼児の姿をまとめて、A3用紙1～2枚のドキュメンテーションを作成した。

### 4. 分析に用いた資料

本研究の分析に当たって、指導案、振り返りと評価の記録、保護者宛の活動報告、ドキュメンテーションを基に事例を整理し書き起こし、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の点から分析と考察を加えた。

## 結果と考察

### 1. 実践の経過と概要

2019年度の活動（第30回～第39回）の概要をTable 1に示した。なお、4、5月は3歳児の預かり保育は実施せず4～5歳児のみの参加であった。全10回の活動に延べ198名の幼児が参加した。在園児の1人当たりの平均参加回数は3.30回であった。

主な活動内容の内訳は自由遊び1回、製作4回、表現2回、運動2回であり、年長児のみ参加した宿泊保育時はグループでの製作中心であった。

以下では全10事例うち3、4、5歳児が参加した7事例の中から、本実践「あそびっこだいさくせん」の先行研究の事例（本田・小椋, 2020, 2021a, 2021b）と比較して特徴的であった、感覚（五感）を働かせて体験を味わう活動を行う2事例を取り上げ、異年齢の幼児同士の関わりの姿を幼児期の終わりまでに育ってほしい姿から捉えて詳述した。

### 2. 事例1 体中で感じてみよう（6月）

#### (1) 遊びの概要

3歳児1名、4歳児3名、5歳児9名の合計13名の幼児が遊戯室で活動した。「全身を使って触感の違いを味わったり違いに気づいたりすることを楽しむ」、「異年齢の幼児や大学生との関わりを楽しむ」の2つをねらいとして、床面に敷き詰めた気泡緩衝材の上で多様な動きをする活動を行った。

#### (2) 遊びの流れ

遊戯室の環境として2つのコースを用意した。1つは、床面に気泡緩衝材を敷いたスペース（約5.00m×3.00m）を作った。もう1つは気泡緩衝材でジグザグに配置し（全長約5.00m×3.00m）、その上を落ちないように出口まで進むコースとした。途中にトンネル（壁はダンボール、天井は気泡緩衝材に数色のカラーセロハンを貼り付けたもの）を置き、四つん這いでくぐるようにした。さらに、どちらのコースも、出口側に机と中身が見えない箱を置いた。箱の中には2種類の形（約

Table 1 あそびっこだいさくせん (2019年度, 第30回～第39回) の概要

通算回数	時期	参加人数	活動名	ねらい	活動の概要
第30回	2019年 4月	3歳児 4歳児 5歳児	なかよし だいさくせん	大学生と一緒にいることへの安心感と、これからの活動への期待感を持つ。	初対面の幼児たちに簡単な自己紹介をし、普段の預かり保育で使用している玩具を使って幼児の遊びに入った。遊ぶときには幼児が主導する遊びに参加するようにした。
第31回	2019年 5月	3歳児 4歳児 5歳児	好きな生き物 つくってみよう	様々な素材を使い、豊かなイメージで生き物を作り動かす表現を楽しむ。	ビニール袋に様々な素材を飾りつけて生き物を作り、持つ部分として毛糸をつけて完成させる。自分の作った生き物の動きをイメージしながら動かしたり飛ばしたりした。背景として用意した草原や池、空などの上で動かしてごっこ遊びをしたり、ウレタン積み木で生き物用の家や滑り台を作ってごっこ遊びをしたりした。
第32回	2019年 6月	3歳児 4歳児 5歳児	体中で感じてみよう	全身を使って触感の違いを味わったり違いに気づいたりすることを楽しむ。	床面に敷き詰められた様々な種類の気泡梱包材や、気泡梱包材で作ったコースの上を歩く、四つん這いで歩く、転がす、手で触って探すなどして全身で梱包材から受ける感覚の違いに気づいたり、特徴を発見したり、自分が好きな感触や踏んだときの音の違いなどに関心を見ていた。
第33回	2019年 7月	3歳児 4歳児 5歳児	ゴックさんになろう	素材の特徴を比べながら、イメージをよりよく表現しようとする。	「ごちそうなあに」(はた, 2014) の読み聞かせ後、一人一つの容器・食器からイメージを広げ、様々な素材を使ってイメージした食べ物(ハンバーグ、カレー、おにぎり、なるとスパゲッティ、海苔巻き、柿味かき氷、綿飴、カレー味の麺、パフェ等)を作った。作った後は折り紙で予め作ったスプーンやフォークを使いごっこ遊びをしながら、さらに作り直してイメージをよりよく表現した。
第34回	2019年 8月	3歳児 4歳児 5歳児	すごろくを作ろう	目的を共有し、他者と話し合いながらイメージしたものを作り出す喜びを味わう。	宿泊保育のねらいの一つである協同性に関連して、グループで1つのすごろく(模造紙2枚分の大きさ、マスの位置は作成済み)を話し合いながら作った。50音表を見ながら頑張って書いたり、ひらがなを書ける他児に頼んで書いてもらったりしながら「こいぬのまねをしたら5つもどる」「すきと200かいいう」などと書き、マスの周囲に絵を描いて完成した。完成後は自分のグループのすごろくを行った。
第35回	2019年 10月	3歳児 4歳児 5歳児	ハロウィンを楽しもう	ハロウィンを知り、親しむ中で、様々な素材から製作し、製作物を交換することを楽しむ。	自作のペープサートの劇により「ハロウィンは、おぼけになって、お菓子ももらえない時間だ」とイメージを広げ、ハロウィンバッグを作った。バッグを持って劇で見たように大学生に「trick or treat」と言って制作したお菓子をもらって回るうちに、自分でもお菓子(マカロン、アイスクリームなど)を作りたくなった幼児はお菓子を製作し、友達と交換し合った。
第36回	2019年 11月	3歳児 4歳児 5歳児	落ち葉をきれいに 並べよう	自然物の様々な特徴に気づき、比べることで、きれいや美しさを味わう。	予め拾い集めて洗浄した大量の落ち葉に触れ、異年齢のグループで比べ方を話し合っ合って決めて、自然物の細かい特徴に気づきながら色や長さの順に並べた。葉の細かな違いに五感を通して注目しながら並べたり、気づいたことを共有したりして、落ち葉のきれいや美しさを味わった。
第37回	2019年 12月	3歳児 4歳児 5歳児	流れ星を集めよう	イメージを共有し、動きを調整しながら思い切り体を動かすことを楽しむ。	自作のペープサートの劇(サンタクロースがブレゼントを作る材料の「流れ星のしっぽ」を集めるようにミニサンタたちに頼む)を見て、準備体操を行い、サンタクロースの手伝いを頼まれたミニサンタ(鬼役)と、捕まらないうように逃げる流れ星(逃げる役)になって、流れ星のしっぽ取りを行った。集めたしっぽを壁面のクリスマスツリーやブレゼントに貼って飾り付けた。
第38回	2020年 1月	3歳児 4歳児 5歳児	ネズミになって チーズを集めよう	イメージを表現しようとして、様々な体で動かすことを楽しむ。	干支であるネズミになりきるために簡単な衣装(折り紙の鼻、毛糸のしっぽ)を付けて、ネズミのように動く中で体の様々な部位を動かすことを楽しんだ。キャラクター(ダンボールで作成、1人用と3人用)を選んで入り四つん這いで走り、チーズの穴のトンネル(チーズに見立てた3枚のパネル)のそれぞれに空けられた2か所の好きな方の穴を通り、紙皿とチーズを四つん這いになって背中に乗せて、落とさないように運んだ。
第39回	2020年 2月	3歳児 4歳児 5歳児	ケーキの中身は何だろう?	イメージを絵や文字等で表現しようとする。	ハロウィンデナーを「お世話になっていた人」にありがとうの気持ちを含めてお菓子をあげる日」と説明し、ケーキの形に切った画用紙を蛇腹折にした台紙を使い、表紙には自分がイメージするケーキを様々な素材(シール、クリウム製の切り抜き、波ダンボール等)で表現した。中身は好きなものや家族の似顔絵等を描いた。ひらがなで手紙を書く幼児を見て、50音表を見て大学生に教えてもらいながら書くこととする姿も見られた。

注：本実践の全体において、「異年齢の幼児や大学生との関わりを楽しむ。」ことを共通のねらいとした。

300cmのハート形、円柱型)の緩衝材を大量に入れて、箱の横に空いた穴から手を入れて、触ってハート形の緩衝材を探すコーナーを作った。

幼児たちはクラスごとの靴置き場の上靴と靴下を置いて裸足になり、好きなコースを何度も通った。最初はただ走り抜ける幼児が多かったが、次第に寝転がる、歩く、四つん這いで歩く、転がる、箱の中身を手で触って探すなどして全身で緩衝材から受ける感覚の違いに気づいたり、特徴を発見したり、全身を使って触れたりした。自分が好きな感触や踏んだときの音の違いなどにも関心を向けて伝え合っていた。

トンネルでは、出たときに「おおかみだー！」と言って逃げる幼児を見て真似をして逃げたり<sup>①</sup>、トンネルの中から大学生に「上から覗いて」と呼びかけて顔を見合ったりした。

2つのコースの出口側にある箱のコーナーでは、ハート型を早く探せるようになってきた幼児が見つつけ方を説明したり、両手にハート形と円柱型をもって「どっちに持っているのでしょうか？」とクイズを出したりしていた。<sup>②</sup>

また、床面に敷いたコースの方では、途中で大学生2名がゴム紐の両端を持ち、気泡緩衝材を敷いたコースの上で動かすと、幼児たちはゴムひもに引っかからないようにくぐったり、またいだり、跳び越えたりした。何往復かすると、幼児の方から「上にあげて」「下にして」と要求が出てきた。さらに、活動の後半で大型の緩衝材を追加すると、幼児は大学生や他児を巻いたり、幼児2名で巻いてもらったり、泳ぐ動きをしたりした。巻かれた時に「助けて」と聞こえると助けに向かった。<sup>③</sup>

幼児たちが気づき、幼児同士または大学生に伝えていた感覚には次のものがあった。

・触覚：

「(気泡緩衝材が)プニユプニユした」と表現した。ハート形の緩衝材を探すときに、他児に「ハートは触った時にここがへこんでいるから、そうなんだよ」と教えていた。<sup>④</sup>また、コースの大きい気泡緩衝材の部分でずっと止まっている幼児に大学生が「どうしたの？」と聞くと、「これ

が一番楽しいんだよ。」と、小さいプチプチとの違いを教えてくれた。コースで「どこを歩いたら一番気持ちいい？」と大学生が聞くと、「さらさら(の緩衝材)が一番気持ちいい」などと教えてくれた。

・視覚：

トンネルを上から覗いて「ここから見たら赤で、ここは青だ」など、視覚的な感覚を楽しんでいた。

・聴覚：

「大きいプチプチ(気泡緩衝材)と小さいプチプチで音が違ったよ」と大学生に教えていた。

### (3) 分析と考察

異年齢の幼児同士の関わり合う姿は「豊かな感性と表現」(下線部①)、「言葉による伝え合い」(下線部②、④)、「健康な心と身体」(下線部③)と捉えることができよう。

この事例の時期は6月であり、3歳児が活動に参加した最初の月であったため、幼稚園の実態から3歳児と4、5歳児がまだ十分親しんでいなかった可能性があり、大学生との会話や応答が多かったと考えられる。また、途中でゴム紐と気泡緩衝材を追加することで環境に変化をもたらしたことで幼児の環境との関わり方にも変化が生じたことが観察された。

## 3. 事例2 落ち葉をきれいに並べよう(11月)

### (1) 遊びの概要

3歳児1名、4歳児11名、5歳児12名の合計24名の幼児が遊戯室で活動した。異年齢のグループになるように席を構成し、「自然物の様々な特徴に気づき、比べることで綺麗さや美しさを味わう」、「異年齢の幼児や大学生との関わりを楽しむ」の2つをねらいとして、落ち葉の特徴に気づいて比べ、並べる活動を行った。

### (2) 遊びの流れ

4~5人のグループで遊戯室の中央の大きな箱に入った落ち葉を紙皿で掬いに行った。グループによって、5歳児が4歳児に先に行くように譲ったり、グループの3、4、5歳児で手をつないで落ち葉を見に行ったりした。<sup>①</sup>

集めた落ち葉をグループの机にある白い模造紙

の上に出して、好きな落ち葉や面白い形を見つけて教え合っていた。大学生は活動のねらいを意識して、「どんな色がある?」「一番長いのはどれ?」と、幼児が関心を向けている特徴について問いかける援助をした。そして、グループで並べ方を話し合うように促しながら、5歳児が中心となって並べ方を考えて決めて、並べ始めた。<sup>②</sup> 幼児たちが関心を向けて、落ち葉同士を比べたり関連づけたりした特徴には以下のものがあった。

・特徴1：色

「赤（の葉）を集める」と言って集めて並べ始めたグループでは、途中で4歳児が赤紫の落ち葉を見つけて「焼き芋色だね」と分類し、「茶色も焼き芋色だね」と混ぜて分類する様子が見られた。また、同じ葉を見ても「赤だよ」「茶色だよ」と意見が割れる様子や、1つの葉の表と裏で色が違うこと、同じ種類の落ち葉でも大きさや色が違うこと、黒くなっている葉っぱがあることなどにも気づいた。<sup>③</sup>

・特徴2：匂い（臭い）

5歳児が並べながら葉の匂い気づいて他児に教えると、4歳児たちが匂いを嗅いで「草餅の匂いする」「お茶の匂いがする」「チョコレートの匂いだよ」「この葉っぱ、臭い」と匂い（臭い）に気づき、関わりを深めていった。<sup>④</sup>

・特徴3：大きさ

葉の大きさを分類する際に「自分の顔より大きいか、小さいか」で分類する幼児がいた。また、葉の大きさを比べる際には5歳児が葉の向きを揃えて並べるとよいことを教えていた。<sup>⑤</sup>

・特徴4：形

グループで葉を種類ごと（イチヨウ、モミジ）に集めながら、4歳児が葉を触ってギザギザしていることに気づき、他の葉の尖り具合を触って比べていた。

・特徴5：触感

4歳児が大きな葉を触りながら、「この葉っぱ、もちもちする」と表現していた。

ある程度並べた頃に活動に飽き始めた幼児が複数見られたため、大学生が木工用ボンドを出して

並べた順に貼るように促すと、貼ることを楽しむようになった。最後に他のグループとお互いの作品を見合った。自分たちのグループとの並べ方の違いや自分たちが使っていない落ち葉に気づいたりしながら美しさやきれいさを味わったものの、他のグループの成果にそれほど興味を持っていない様子の幼児も見られた。

(3) 分析と考察

異年齢の幼児同士の関わり合う姿は「道徳性・規範意識の芽生え」及び「社会生活との関わり」（下線部①）、「協同性」（下線部②）、「豊かな感性と表現」（下線部③、④）、「思考力の芽生え」（下線部⑤）、と捉えることができよう。この事例では異年齢の幼児のグループを構成したために、様々な人との関わり方と関連する「社会生活との関わり」の姿は発揮されやすく、さらに年下の幼児が行動しやすくなるようにふるまう姿は「道徳性・規範意識の芽生え」として捉えることができよう。また、「協同性」と「思考力の芽生え」は本事例の5歳児の11月という時期に大きく伸びている資質・能力であると思われ、異年齢の幼児同士が関わり合う中で観察されやすかったと思われる。そして、本事例で見られた「豊かな感性と表現」は落ち葉という物との多様な関わり方の姿として抽出されており、多様な感性には年齢による差のみでなく個人差があることが示唆される。

総合考察

1. 本研究のまとめ

本研究の目的は幼児の異年齢集団の遊びの中で観察された異年齢幼児同士の関わりの様子を幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の点から読み取り、抽出することであった。

(1) 発達の点から見た事例の特徴

本研究で詳述した2事例の共通点は、感覚（五感）を働かせて体験することを重視した環境であったことである。製作活動などでは3、4、5歳児のそれぞれの発達や幼稚園生活での経験の差を踏まえた環境の構成が重要になるが（本田・小

椋, 2020), これらの2事例は感覚(五感)を働かせて体験することを重視したため, 製作活動に比べると3, 4, 5歳児で共通の環境を構成しやすかったと思われる。高山(2014)は子どもの発達を考慮した構成のレベルを「簡単すぎる環境」「発達に合った環境」「挑戦的な環境」「難しすぎる環境」の4つに分類している。本事例の環境は3, 4, 5歳の一人ひとりの関わり方や感じ方が保障されやすかったため, 発達に合った環境であったと考えられる。その反面, 一人ひとりの体験の違いを十分に観察して言葉で表現することを援助したり, さらには言葉で表現しきれない感覚自体も認めたりする援助が求められる環境であったと言える。

感覚を働かせて体験する活動であったため, 年下の幼児の環境との関わり方を見て真似をしたり, 同じ動作をしても感じ方が異なっていたりした点は, 異年齢集団の遊びの中で年齢に関わらずお互いに影響し合う状況になったであろう。その意味で, 本研究の目的に照らしてこれら2事例を取り上げたことに一定の妥当性があると思われる。

2つの事例の違いについては, 時期による幼児同士の人間関係の発展の差が挙げられる。事例1は3歳児が初めて参加した6月の事例であり, 同年齢の幼児同士あるいは大学生との関わり合いは多く見られたが異年齢の関わりは少なかった。一方で事例2は11月に行われたものであったことと, 予め異年齢の幼児同士のグループになるように席を配置したため, 異年齢の幼児同士の交流が多く生じた。

## (2) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿からの幼児理解の特徴

本研究では異年齢の幼児同士の関わりの様子を幼児期の終わりまでに育ってほしい姿から捉えた。その結果, 2つの事例から「健康な心と身体」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」に関わる姿が抽出された。本研究で詳述した2事例はいずれも感覚を働かせて体験する活動と, その体験の様子をお

互いに観察し合ったり伝え合ったりしやすい環境であったため, 「健康な心と身体」「豊かな感性と表現」が見られやすかったと思われる。

反対にこれら2事例から抽出されなかった「自立心」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形, 標識や文字等への関心・感覚」は, 本研究で詳述した事例の特徴により見られにくかった可能性と, 異年齢の幼児同士の交流という点からは確認しにくかった可能性が考えられる。

## 2. 本研究の限界と課題

本研究の限界と課題を2点述べる。第一に, あくまで1回の実践を行った2つの事例の分析のため, 年齢による違いと個人差の弁別ができない。今後の研究では年齢ごとのねらいを立てることで発達に応じたより適切な環境を構成し幼児理解を深めることが課題である。

第二に, 本研究のように一様な環境の中で活動する異年齢の幼児の体験を幼児期の終わりまでに育ってほしい姿という共通の観点から捉えることで, 発達段階ごとの資質・能力の育ちの違いや, 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿から捉えた発達過程を記述することも今後の課題である。

## 引用文献

- 青木一永(2018). 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿をどのように指導に生かすか 無藤隆(編著) 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿(pp.99) 東洋館出版社
- はたこうしろう(2014). ごちそうなかに ポプラ社
- 本田真大・小椋美和子(2020). 教員養成教育としての預かり保育への参加の意義と課題—幼稚園の異年齢集団遊び「あそびっこだいさくせん」の実践(1)—北海道教育大学紀要(教育科学編), 71(1), 15-24.
- 本田真大・小椋美和子(2021a). 幼児の挑戦的意欲の発揮を促す教材の検討—幼稚園の異年齢集団遊び「あそびっこだいさくせん」の実践(2)—北海道教育大学紀要(教育科学編), 71(2), 21-30.
- 本田真大・小椋美和子(2021b). 幼児教育における主体的・対話的で深い学びの体験の抽出—幼稚園の異年齢集団遊び「あそびっこだいさくせん」の実践(3)—北海道教育大学紀要(教育科学編), 72(1), 61-69.
- 厚生労働省(2017). 保育所保育指針(平成29年告示)フ



レーベル館

- 宮里暁美 (2018). 5歳児の育ちを「10の姿」から捉える  
ということ 宮里暁美 (編著) 保育がグングンおもしろ  
くなる 記録・要録書き方ガイド (pp.72) メイト
- 文部科学省 (2017). 幼稚園教育要領〈平成29年告示〉フ  
レーベル館
- 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説〈平成30年3月〉  
フレーベル館
- 文部科学省 (2020). 幼児教育の質の向上について (中間  
報告)  
Retrieved from [https://www.mext.go.jp/content/20200611-mxt\\_youji-000007862\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200611-mxt_youji-000007862_2.pdf) (2021年3月2日)
- 無藤隆 (2018a). 10の姿プラス5・実践解説書 よく分か  
る解説&写真で見る実践事例 ひかりのくに
- 無藤隆 (2018b). 幼児期の終わりまでに育ってほしい10  
の姿 東洋館出版社
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2017). 幼保連携型認  
定こども園教育・保育要領〈平成29年告示〉フレーベ  
ル館
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018). 幼保連携型認  
定こども園教育・保育要領解説〈平成30年3月〉フレー  
ベル館
- OECD (2006). *Starting strong II: early childhood education  
and care*. OECD Publishing. (OECD 星三和子・首藤  
美香子・大和洋子・一見真理子 (訳) (2011). OECD  
保育白書—人生の始まりこそ力強く 乳幼児期の教育と  
ケア— (ECEC) の国際比較 明石書店)
- 高山静子 (2014). 環境構成の理論と実践—保育の専門性  
に基づいて—エイデル研究所

## 付 記

本研究にご協力頂きました幼稚園の皆様、なら  
びに大学生の皆様にご感謝申し上げます。

(本田 真大 函館校准教授)

(小椋美和子 附属函館幼稚園非常勤教諭)